

## 42 頤髄損傷患者と家族が在宅生活に向け宿泊介護体験することの意味

～家族自身の主観的な体験に焦点を当てて～

病院看護部 4階病棟 石田綾子、山本恵子、吉田尚子

**【はじめに】** 当病棟では、頤髄損傷患者とその家族に対し、在宅療養の具体的イメージ化と介護力強化のために、宿泊介護体験指導をおこなっている。患者の障害の重さや介護に対する戸惑いと負担などを抱えながらも、在宅介護を決断した家族にとり、宿泊介護体験がどのような体験であるのかについて考察した。

**【目的】** 本研究の目的は、頤髄損傷患者の家族が患者の入院中に宿泊による介護体験をすることが、どのような介護の意味をもたらすのかを明らかにすることとした。

**【研究方法】** I.調査対象（協力者）：宿泊介護体験をする4名。II.調査期間：平成23年7月～平成24年1月。III.1.データ収集方法：半構造的インタビュー法。2.インタビュー時期：宿泊介護体験前後、退院後1週間以内。3.協力者の許可を得て録音した。IV.データ分析方法 1.録音されたデータはすべて逐語録におこした。2.カテゴリーを整理し統合した。3.テーマに沿ったものに焦点をあて、心理過程や過程に沿った援助に対するニーズを明らかにした。V.倫理的配慮：当院倫理審査委員会承認を得た。協力者に研究の概要と参加の自由、調査以外の目的で使用しないことを文書と口頭で説明し同意書を得た。

**【結果】** インタビューにより宿泊介護体験から6つの意味を抽出した。I.他者からの後押しで、在宅介護をすることを決意した。II.体験による達成感から、何とかやっていける感覚を得た。III.1人では介護できないことを理解した。IV.介護を引き受けることによる自身の人生の満足へと繋げられる感覚を得た。V.ライフスタイルを犠牲にしなければならない事実に対応する工夫を知った。VI.患者、医療者の認識のズレを知った。

**【まとめ】** 家族自身の主観的な体験に焦点を当てたところ、介護不安や戸惑いが了承や決断に変化する過程をみることができた。自己効力感を生み出すものに、バンデューラの提唱する「言語的説得」「達成体験」「想像的体験」「代理経験」がある。結果から、協力者らは自分に能力があることを言語的に説明・説得を受けたことや励ましなどにより、退院という現実問題に向け前進できた。協力者が体験を成し遂げたことや、褒められる、労われる、認められるといった経験が達成感に繋がった。さらに社会資源によるマンパワーの確立が図れ、協力者が1人で全てを背負わずに済む介護生活をイメージできた。自分と同じ境遇にある人を新聞や人間関係の中で認知することで勇気付けられ励みとし、自身の人生の満足感へと繋がられた。看護者が社会資源の活用内容の調整に努めたことで、主介護者のプライベートの時間・人生の価値感を維持でき、前向きに捉えてもらえられた。

病院に宿泊して介護指導を受けるという特殊な環境のもと、主介護者は強い緊張状態にある。また、家屋改造や諸手続きなどと併行して介護指導を受ける状況は、主介護者にとり多忙であり負担が大きい。看護者は家族がそのような状況に置かれている事を理解し、共感的態度で指導に臨むことが求められる。体験のスケジュールは家族像に適した内容を検討し、在宅介護を前向きに考えていけるようにする必要がある。